

## 結語 ——元帥神の起源と変容——

これまで『三教搜神大全』<sup>1)</sup>や『道法会元』<sup>2)</sup>、また通俗文学の資料を中心に、元帥神について考察した。ここではそれに基づき、元帥神の由来と変容についてまとめてみたい。

まず、元帥神自体は五代から宋にかけて、神霄派や天心派などの発展とともに、道教に流入したものであることは間違いないと思われる。

それでは、こういった元帥という神は何処から来たものか。

六朝から唐代にかけてこれらの元帥神が存在しなかったと考えられることは、すでに見た通りである。元帥神は三目や九目、三頭六臂や四頭八臂といった姿を持つ。また憤怒相である者も多く、多種多彩な武具を携える。もともと中国の伝統的な神は、方相氏や蒼頡といった四目を持つものはあったが、三目のものはほとんど無かった。さらに『道法会元』などには、元帥神に付随するものとして、多量の陀羅尼系の呪文を記載する。

すなわちこれらから、元帥神がインド伝来の密教神の形象の影響を受けたものであることは容易に想像される。特にその形象は、明王や憤怒の菩薩の相の姿を模したものと推察される。しかし一方で、明らかに密教起源であると考えられる神は実は少ない。例えば、馬元帥がそうだと思うるが、この神も密教の影響を受けているだけであり、直接の密教神の流入といえ、むしろ哪吒太子が挙げられる。他の神々の起源は、もっと多様で複雑である。

例えば、鄧天君のような古来の雷神があれば、殷元帥のように星神であったものもあり、また宋元帥のように火の神であったものもある。また関元帥のように、史上的人物が厲鬼として恐れられていたものもあれば、趙元帥のように、六朝道教以来の瘟神が変化したものもある。これらの神々は、形象や性格については、互いに影響を与えながら発展していった。

一応は唐代の密教の流入が、中国の宗教文化に強く作用し、その結果として様々な元からあった信仰から作り出された神が元帥であるとは言えよう。何故元帥が唐代以後に発生したかは、これにより説明可能となる。

ただ、多くの元帥神は、恐らく民間の巫者において作為されたと考えられる。林靈素の時期にむしろ元帥らしき神が重要視されていないのは、すでに見た通りである。初期の天心派經典においても、それほど多くの元帥神は見えていない。

ストリックマン氏が白玉蟾の言を引いて論じているように、南宋における巫者層と道教の関係は一筋縄ではいかないものであったと思われる<sup>3)</sup>。

巫者の法は、娑坦王に始まる。そしてこれが盤古王に伝わり、再び阿修羅王に伝わる。また維難陀始王・長沙王・頭陀王・閭山九郎・蒙山七郎・横山十郎・趙侯三郎・張趙二郎に伝わったが、この後どうなったかは分からない。むかし巫者の法術には、盤古法なるものがあり、また靈山法なるものがあり、さらに閭山法なるものがあった。しかしその実は一つの法術である。<sup>4)</sup>

さらに白玉蟾は、このもっと後の文章において、「瑜珈とは何か」と聴かれて「釈教の遺教である」と答え、その護法の神として、「雄威・華光の二大聖」や「那义太子」「深沙神」などを挙げている。

白玉蟾の見ていた南宋期の宗教界は、恐らくこのような、仏教・道教や民間の巫者の法が様々に混同されて展開していたものであったろう。博学多識の白玉蟾ですら、なおこのような認識なのである。ましてや一般の巫者層にあっては、それが仏教起源であるか、民間信仰起源であるかはどうでもよく、とにかく効き目のありそうな法術を重視したのであろう。「関三郎」や「招宝七郎」にしても、このような民間層において作為せられた神であり、また元帥神も、同様に雑多な要素を組み合わせで作られていったことが推察される。

但し、元帥神は道教に取り入れられた後も、あちこちの流派でまた作為され、いろいろな性格が与えられていったと思われる。白玉蟾が嘆いたように、各派においてはかなり恣意的に法術と神将を結びつけていく傾向があったようだ。この結果、『道法会元』や『法海遺珠』<sup>5)</sup>に見えるような、夥し

い数の元帥や、將軍・靈官・天君などといった神々が存在することとなった。

これらの元帥は、本来は特定の法術と密接な関係を持つものがほとんどであったが、徐々に主に清微派が中心となって行われた神体系の再構築の中に取り込まれていくことになった。『道法会元』には、その整理される前の体系と、整理された後のものが雑然と混在しているので、その動向を把握することは困難である。

しかし強いて言うなら、『道法会元』前半部においては清微派によってやや整理されたものが目立つ。『法海遺珠』にはそういった傾向が見えない。それが整然と体系化されたものは、むしろ『無上黄籙大齋立成儀』<sup>6)</sup>などに見えている。ここで整理された神体系は、今度は逆に道教や民間宗教の祭祀儀礼に大きな影響を与えていったものと考えられる。

現在の台湾で行われている儀礼書に、鄧天君・劉天君・趙元帥・馬元帥・殷元帥などの名が見え、一方で唐・葛・周三將軍や崔・盧・鄧・竇元帥などの名も見えているのは、このことを示すものと考えられる<sup>7)</sup>。また四川の道壇の儀礼文書に見える元帥神が、ほぼこれらと一致するもの、実にこの体系がある種の標準になったことを示してもいよう<sup>8)</sup>。また民間祭祀の儀礼書にも、これらの元帥神の名は必ずといってよいほど登場する。

そして元から明にかけて、元帥神はまた民間において別途に発展を遂げた。そして、鄧天君や殷元帥や温元帥や馬元帥などには、独自の故事が付加されていくことになった。

『搜神広記』に含まれる関元帥・趙元帥・二郎神の説話がかなり道教の經典類に近いのに対し、『三教搜神大全』で新たに増やされた温元帥・殷元帥・王靈官などの多くの元帥に関する故事は、ほとんど道教經典との関連性が薄い。例えば温元帥の故事が、『地祇上将温太保伝』<sup>9)</sup>と『三教搜神大全』では全く異なったものとなっているのは、このような傾向を示すものである。このように新旧の要素が混在しているのが、また『三教搜神大全』の特色である。

さらに『西遊記』や『封神演義』といった通俗文学においては、民間で発展した元帥神の諸相が強く反映されている。例えば、道教經典においては

鄧・張の二元帥は、それぞれ鄧伯温・張元伯という名であるが、『西遊記』では鄧化・張蕃となっている。その故事も、恐らくは民間において独自に発展したものがあったと思われ、多くの戯曲や小説に見える元帥神の故事は、また『三教搜神大全』に見えるものとも異なっている。

また、『道法会元』において非常に多くの元帥神が存在したが、その多くは通俗文学作品においては姿を見せることなく、ごく一部の神格がクローズアップされることになった。すなわち、温・関・馬・趙四大元帥や陶・張・辛・鄧・苟・畢・龐・劉の各天君、さらに王靈官や殷元帥などである。現在多くの道観や廟に祀られる元帥神は、ほとんどはこれらの著名な神格が元になっている。これらの神の幾つかは、関元帥が関聖帝君となり、趙公明がもっぱら財神として扱われるようになるなど、それ以降も変化を遂げていき、民間信仰における主要な神格となった。一方で馬元帥のようにやや信仰の衰えたものもある。

このように、元帥神は元明の道教儀礼文書において固定された体系があり、それが後の儀礼に大きな影響を与えた一方で、民間に独自に発展した体系と、それに付随する故事があり、変容し発展していった。『三教搜神大全』には、ちょうどその変容の中間の過程が反映しており、幾つかの由来不明な元帥神も存在する。

とはいえ、これは極めて単純化して考えたものであり、実際には元帥神の神体系は、もっと複雑な変容と過程を経ている。例えば衰えたはずの元帥神でも、儺戯に見られるように、現在でも一部の地域で信仰が残されているものがある。

そして現在盛んな信仰がある関帝や趙公明や王靈官といった神々は、このような過程を経なければ、いま祀られていることは無かったであろうと推察されるのである。これらの神々が発展したそもそものきっかけは、元帥神として道教で重んじられたことにあった。『道法会元』に見られるように、張虚靖は始め関羽の名を知らなかったのである。それほど無名であった。趙公明にしても、六朝の道教經典に名が見えるものの、元帥神とならなかったら、その存在を知られることは無かったであろう。むしろ、一方で元帥神の

大半が、そのように信仰が発展することも無く、廃れていった。元帥神に限らず、現在の道教や民間信仰の神々の多くは、皆そのような変容を経て現在の姿になっていることを常に考えておく必要がある。

## 注

- 1) 『道法会元』（『正統道蔵』 正一部S. N. 1220）
- 2) 『絵図三教源流搜神大全（外二種）』（上海古籍出版社・1990年）
- 3) ミシェール・ストリックマン、安倍道子訳「宋代の雷儀——神霄運動と道家南宗についての略説——」（『東方宗教』第46号・1975年）22頁、また『海瓊白真人語録』（『正統道蔵』 正一部S. N. 1307）による。なお、ストリックマン氏は「娑坦」を「サタン」とする。
- 4) 原文：巫者之法、始於娑坦王、伝之盤古王。再伝於阿修羅王、復伝於維難陀始王・長沙王・頭陀王・閻山九郎・蒙山七郎・横山十郎・趙侯三郎・張趙二郎。此後不知其幾。昔者巫人之法有曰盤古法者、又有曰靈山法者、復有閻山法者。其实一巫法也。
- 5) 『法海遺珠』（『正統道蔵』 太平部S. N. 1166）
- 6) 『無上黄籙大齋立成儀』（『正統道蔵』 洞玄部S. N. 508）
- 7) 大淵忍爾編『中国人の宗教儀礼——仏教・道教・民間信仰』（福武書店・1983年）247～248頁。
- 8) 段明編著『四川省江津市李市鎮神霄派壇口科儀本（上）』（『中国伝統科儀本彙編3』 新文豊出版公司・1999年）231～232頁。
- 9) 『地祇上将温太保伝』（『正統道蔵』 洞神部S. N. 780）

## 後 記

「現在、また過去において中国において祭祀される神々は、

何処から来たのか」

近年、自分が取り組んでいるテーマを記すと、このようになるのかもしれない。しかし、これは実はとんでもない問題で、調べれば調べるほど分からなくなると言ってもよい。

実のところ、いまだに閼帝や媽祖の信仰が、何故これだけ特別に発展したか、それすらも分からない。そもそもこれほどメジャーな神々であるにもかかわらず、その起源は曖昧模糊としている。ましてや他の神々については、手探りで調べていくのが精一杯という現状である。いまさらながら、無謀なことをやっている感がある。

ただちょっと弁明をさせてもらうなら、とにかく資料面の困難があることは間違いない。民間の神々については、それを信仰する民衆自体が記録するということはまず無い。いずれにせよ一応文字の書ける者が記録するわけである。しかし識字層の多くは、民間信仰などという低俗なものにはあまり注意しない。このために民間の神々については、まずそもそも資料自体が存在しないという問題がある。

これに比して、道教經典に記される神仙はまだしもであるが、逆にこちらは夥しい記載がありすぎて混乱する。『道法会元』など、いをもって、全くどう扱ってよいか分からない經典である。さらにそういった神々については、時代的・地域的に截然と区別がされているわけでも無い。また現在信仰される神々は、民間出自のものが大半を占めているため、難しい經典にはあまり記載が無い。むしろ白話小説や戯曲といった資料に豊富な記載があるのだ。

幾つかの神々について、『三教搜神大全』などの民間信仰側の資料、また『西遊記』『封神演義』などの通俗文学作品を使って総合的に検討してみようという試み自体は、すでに『中国民間諸神』などでも行われている。小著ではさらに加えて『道法会元』などの道教文献を使用し、元帥神の分析を行っ

た。しかし資料の扱いの困難さと能力の非力さゆえに、十分なものとはなり得なかった。反省材料は多々あるが、一方で、これまで検討されてこなかった幾つかの問題に、幾許かの方向を示せたという点はあると思う。ただ、あくまでその程度であるのは慚愧に耐えない。

またここで些か個人的な事情を記すことをお許しいただきたい。自分は東洋大学の文学部を卒業し、早稲田大学の院を出てより、仙台の東北大学、水戸の茨城大学と職場が異動した。もともと院に入る前も、会社員・プログラマなどをやっており、数年ごとに所属と居住地を変えてきた。経歴からしても、研究者という位置づけというより、ある意味好事家と言った方がよいかもしれない。そのためか、この間一般書の執筆は幾つかあったものの、学術関連の業績はあまり無かった。それまでの職場では雑事及び教育の仕事が中心であり、あまり研究に重きが置かれなかったということもある。

2004年に関西大に移り、近畿大阪に移り住んだ。そして東西学術研究所の研究員に加えて頂き、ようやく研究関連に力を入れてもそれほど怒られない環境となった。それまでに業務の間を縫って、玄天上帝や哪吒太子といった神々を論じた小文を発表してきたが、小著では同様の手法を使って、馬元帥・趙元帥・殷元帥といった元帥という神の信仰について検討してみた。ただそれまでの幾つか発表していた論文についてはほとんど使わず、書き下ろしの形に近い。これをまず東洋大学に学位請求論文として提出した。しかしこの論文においては基本的な説明を欠くことが多く、どこが核心となる部分か、やや分かりにくかった。その後東西学術研究所の、またアジア文化交流研究センター（CSAC）の研究員となり、中国南方の廟を見る機会が増え、さらに京都などの近畿の寺院を見ることも多くなった。馬元帥華光が宇治の萬福寺に存在することを教えて頂いたり、望外の運にも恵まれた。こういった経験を踏まえて、大幅に加筆及び訂正を加え、構成も変えて、「元帥神」を中心として新たに組み立てたのがこの小著である。なお第一章については、ほぼ同内容のものを中国語に訳した上で、2004年に台湾台北の中央研究院において開催された「聖伝与詩禪・学術研討会」で発表している。

小著は一応学術書に類するものと思われるが、学術書らしき体裁について

は、なるべくこれを避けたつもりである。実は海外を訪問するたびに、日本の学術書のあまりの高額さに、そもそも購入を控えてしまうという話をたびたび耳にする。そのため、小著ではなるべく安価たることを目指した。索引が無いことについてはお詫びせねばならないが、これは固有名詞だけでも膨大な量になるためである。ただこれについては、なるべく早い時期にダウンロード可能な電子的なツールを作成して代替するつもりである。

また引用文献はほぼすべて拙い訳を載せた。これは一般読者の方にもなるべく理解していただくためである。そもそも小著は、現在の学界ではあまり役に立たぬものであり、好事家の方が参考にすることが多いと予想する。むしろ原文は注に載せているので、そちらを参考にしていただけありがたい。

小著が成るまでには、関西大学文学部中国語中国学専修の吾妻重二先生をはじめとする先生方、また東西学術研究所CSACセンター長の松浦章先生をはじめとする先生方には、多くのご迷惑をおかけし、ご助力を賜った。特に東西学術研究所長の橋本征治先生には序文を賜ることになり、感謝の至りである。さらに前所長の藤善眞澄先生から、七郎神についての貴重な示唆を頂いた。また研究所事務室の田中文子氏、遊文舎の西澤直哉氏には多大なるご協力を頂いた。なお、小著中にすべては引用できなかったが、多くの方にもいつも暖かいご指導を頂いていることを改めて感謝したい。特に道教文化研究会の先生方、真言宗豊山派現代教化研究所の田中文雄先生、東京成徳大学の増尾伸一郎先生、元皇學館大学の故前田繁樹先生、筑波大学の丸山宏先生、筑波大学の松本浩一先生、國學院大学の浅野春二先生、専修大学の土屋昌明先生、茨城キリスト教大学の志賀市子先生、東京大学の横手裕先生、早稲田大学の森由利亜先生などの長年にわたるご指導に感謝したい。また、中国古典小説研究会の先生方、京都大学人文科学研究所の金文京先生、埼玉大学の大塚秀高先生、神奈川大学の鈴木陽一先生、早稲田大学の岡崎由美先生に感謝したい。さらに大学院にてご指導いただいた早稲田大学の福井文雅先生、小林正美先生、学位論文を審査いただいた東洋大学の吉田公平先生、山田利明先生、竹内清己先生、台湾留学中にお世話になった台湾中央研究院の李豊楙先生、玄奘大学の王秋桂先生、成功大学の丁煌先生、清華大学の胡萬川先

生、輔仁大学の鄭志明先生、ご著書を快くお譲りくださった李遠国先生、萬福寺に華光が存在することを教えてくださった黄檗宗の田中智誠先生などの諸先生方にも、この場を借りてお礼を申し上げたい。

関西大学文学部にて、二階堂 善弘 2006年7月

関西大学東西学術研究所研究叢刊27

## 道教・民間信仰における元帥神の変容

---

平成18年10月1日 発行

著 者	関西大学東西学術研究所研究員 二 階 堂 善 弘
発 行 者	関西大学東西学術研究所 〒564-8680 吹田市山手町3丁目3番35号
発 行 所	関 西 大 学 出 版 部 〒564-8680 吹田市山手町3丁目3番35号
印 刷 所	株式会社 遊 文 舎 〒532-0012 大阪市淀川区木川東4丁目17番31号

©2006 NIKAIDO Yoshihiro

Printed in Japan

ISBN4-87354-435-1 C3014

落丁・乱丁はお取替えいたします